

## 富山の治水に貢献した蘭人技師（ムルデルとデ・レイケ）

### （二）ヨハネス・デ・レイケと常願寺川治水 —その2—

富山県郷土史会常任理事  
デ・レイケ研究会員

前 田 英 雄

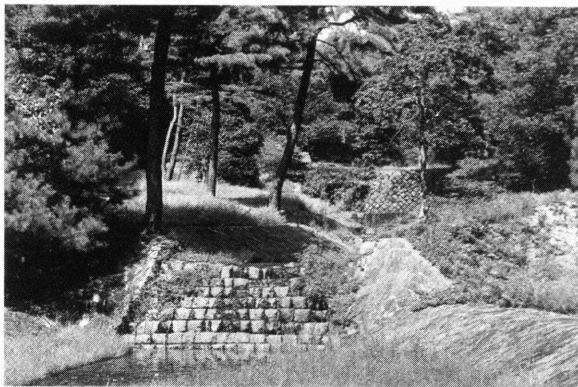
#### 1. 国内河川の治水

##### （1）淀川治水工事

デ・レイケの日本招聘理由は大阪港改修と淀川治水のための技術者の増員であった。大阪港には淀川上流から大量の土砂が流出して港の水深を浅くし機能をそこなっていた。淀川治水のために水源地帯の砂防工事が先決であった。彼の政府への報告書も「淀川改修の総工費の三分の二は砂防工事に使うべきだ」と断言した。

デ・レイケはわが国最初のアランダ式ダムを1875年（明治8年）淀川水系不動川（京都市山城町）に築造した。126年を経た今もなお6基のダムが機能を発揮し、度々の水害を克服してきた。

写真1. 淀川支流不動川の日本最初の巨石ダム（デ・レイケ設計）



最大のものは高さ10m幅70mの規模で、表面を花こう岩で階段状に覆われたもので“鎧ダム”ともいわれている。また、デ・レイケは禿山<sup>はげ</sup>の山腹砂防技術として斜面に藁をはみその上で松苗を植樹し山腹の崩落を防いだ。後に木曾三川にもこの工法を適用した。

##### （2）福井県坂井港（現三国港）の改修

坂井港改修工事は1876年（明治9年）からで、始め一等工師エッシャーが改修計画を立案した。

写真2. 三国港防波堤



しかしエッシャーは1878年（明治11年）にオランダに帰国したので、デ・レイケはその後を引き継ぎエッシャー案を修正して改修した。坂井港は九頭龍河川口に位置する。九頭龍川はその名のよう<sup>そだ</sup>に上流域は多数の支川にわかれているので崩壊土砂は多量に河口に運ばれた。また河口には冬になると強い偏西風がたえまなく吹いて砂浜の砂を運び、海岸部は砂丘となり河口も塞がれ港は水深1mしかなかった。九頭龍川右岸から長さ540m幅9mの石積みの堤防を築き西風を防ぎ、対岸（左岸）は180mの粗朶<sup>そだ</sup>による水制をつくった。河口の土砂はこの防波堤と水制によって川の流れる水のみで自然に海へ押し流され、水深3mを確保することが可能になった。1880年（明治13年）開港式を挙げた。港は昔の盛況を取り戻し、巨大な防波堤は今もその役割を果たしている。

##### （3）木曾三川の治水

木曾三川とは、木曾川、長良川、揖斐川のこと<sup>おかこいつつみ</sup>で、三川が合流して海に注ぐ西濃地方はわが国有数の洪水多発地帯であった。洪水の原因は三川の合流という自然的なもの以外に、親藩尾張藩が築いた「御囲堤」にもあった。すなわち対岸美濃の堤防は「御囲堤より低きこと三尺なるべし」とい

## 写真3. 木曾三川（木曾、長良、揖斐）の河口



うことであった。木曾三川流域の住民は洪水に対して「輪中提」を営々として築いて水防共同体で身を護ってきた。

デ・レイケの木曾三川の治水計画は、三川の間背割堤を設け、分離して洪水が発生した場合でも他に影響を与えないようにすることであった。これに対して三川が合流したところで堤防をつくると舟が通れなくなると地元民の懸念があったが、デ・レイケは「閘門」をつくれれば解決できると退けた。

## 写真4. 木曾三川船頭平公園に建つデ・レイケ銅像



1878年（明治11年）彼は木曾川流域部の踏査、1880年（明治13年）上流部の水源地を踏査して、木曾川改修計画を1884年（明治17年）から1886年（明治19年）に完成した。工事は1887年（明治20年）に着工し、1900年（明治33年）に分流工事が完成した。この改修工事により水害常習地帯であ

った木曾三川沿線の洪水被害は大幅に減少した。

1987年（昭和62年）10月9日工事着工から100年を記念して木曾川船頭平公園にデ・レイケの壮大な銅像が建立された。この時デ・レイケの孫の手によって除幕式が行われた。

## 2. デ・レイケの来日と人物像

## (1) 来日の動機

デ・レイケはオランダの首都アムステルダムの方南100キロメートル、オランダの最南部コリンズプラートという町で生まれた。彼の家は代々の築堤業者で彼も少年のころから家業にたずさわった。1867年（慶応3年）アムステルダムと北海を結ぶオランニエ閘門の工事現場の主任となって工事を成功させる秀れた技術者になっていた。この時彼をやがて日本に呼びよせるドールン（日本が雇用したオランダ技師長）が上司であった。しかもドールンはデ・レイケを高く評価したのである。1873年（明治6年）日本政府はオランダ技術者増員をドールンに依頼した。ドールンはかねて期待していたデ・レイケと来日希望を持っていたエッシャーとさらに若いチッセンを推した。

当時日本は欧米先進国の文明を受け入れることを急ぎ、近代国家として成長しようとしていたので大勢の知識人・技術者を雇用した。この人達を「お雇い外人」と呼んだ。彼らの来日の動機はさまざまだったが、幾つかのパターンがあった。

- ①本国での挫折 フェノロサ、ハーン
- ②日本への積極的関心 エッシャー、ムルデル
- ③日本政府の厚遇
- ④先進国として文明・技術を伝えようとした使命感

デ・レイケは学歴が無かったが実地で鍛えた技術を持ち合わせたので存分に発揮したいという功名心と③の厚遇に引かれたのでないかと推測される。そのころオランダは不況の苦しい時代に遭遇しており、日本政府の高い給料に対する魅力があったのかもしれない。

1873年（明治6年）8月3日、デ・レイケとエッシャーはフランス、マルセイユ港を出航した。エッシャーはデルフトの王立アカデミーを出たエリートで一等工師として着任するので一等船室、デレイケは四等工師なので二等船室に入った。58

写真5. デ・レイケ (左) とエッシャー



日間の長旅を経て任地大阪に到着したのは同年9月25日であった。

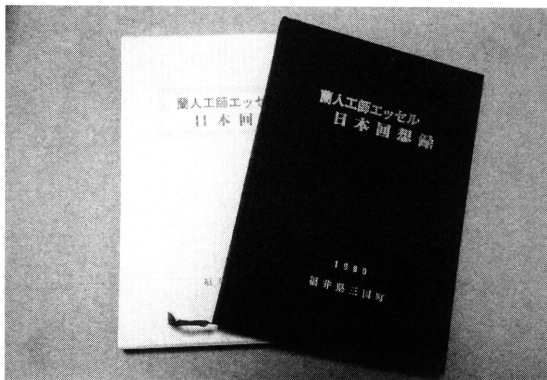
デ・レイケはこの日以来、離日する1903年(明治36年)まで30年間にわたって在日し、30歳の壮年だった彼は60歳となっていた。

## (2) デ・レイケの人物像

来日の長い航海はデ・レイケにとって生涯の親友となるエッシャーにめぐり会えたのである。エッシャーとは坂井港・淀川・大阪港の改修に共に従事し多くのものを学んだ。エッシャーもデ・レイケの技術を高く買いその人間性にも好感をもった。また、二人の家族も親しくつきあった。

1990年(平成2年)エッシャーの「日本回想録」が出版された。その中にデ・レイケについて詳しく好意に満ちた長文の内容が記されている。エッ

写真6. 蘭人工師エッセル「日本回想録」



シャーがオランダの母親に宛た1875年(明治8年)10月14日の手紙の一部を次にのせる。

—前略— また、デ・レイケと一緒に働けるこの好機に、彼から沢山のことを学びたいのです。今日までの半生をこの道一本に生きてきた彼の技術は、実地で鍛えた筋金入りです。(彼の父は請負業で兼業農家を経営しています。) 彼の实地に即応した工学知識は、折りあるごとに現場の技師に問い質して、さらに独力で修得した成果です。鋭敏な知性、好感を呼ぶ態度、天賦の観察力、かなり優れた記憶力、考え方も話し方も、そして文章を書かせても、独創的で核心を衝いています。彼の仕事は素早い上に、渾身を打ち込むので、当然ながら抜群の効果を収めます。エンジニアの学位を取得している者の中でも彼ほどの人物に会ったことはありません。

しかし、彼の来日を促したファン・ドールンを含めて誰もがデ・レイケを僕がするように高く評価しているわけではありません。高等教育を受けた技師の多くが公平な見方をしないのです。彼らは自分と同じように特権階級の教育を受けた者を優先偏好し、そうでない者に対して公正にふるまわないのです。—中略—

平等精神と有用性の観点からも、僕はデルフト王位アカデミー出身の技師たちよりも、デ・レイケのような人材を高く買っています。勿論僕はデ・レイケと働くことによって対局させられる不愉快な一面があることを否定しません。僕は彼が自分の劣等を肯定する態度にたびたび応接させられています。しかし、このような不満も彼との親交がもたらしてくれる恩恵に比べたら、取るに足りないものです。オランダでデ・レイケのような立派な師匠に出会える事はまずあり得ないでしょう。—中略—

このような事情にかかわらず、デ・レイケの俸給が少すぎることを悲しく思います。少なくとも僕と同額であるべきです。日本への貢献度は僕のそれよりも断然上回っているからです。

## 3. 功成り名を遂げた晩年

デ・レイケは同僚のオランダ人技師が日本に一人もいなくなってから十余年も止まって、治水と港湾事業に尽くした。それはただ仕事への興味や

執念だけでなく、日本の風土に対する愛着、日本人への愛情があったからでなかろうか。日本滞在は実に30年の長いものであった。日本政府はデ・レイケの功績を高く評価し、外務大臣小林寿太郎から出された叙勲申請書には、「一上略一本邦ニ雇入シ以来今日ニ迄前後三十年間、久シキ終始一日ノ如ク能ク其職任ヲ尽シ本邦ニ貢献セシ功勞偉大ナリトス」

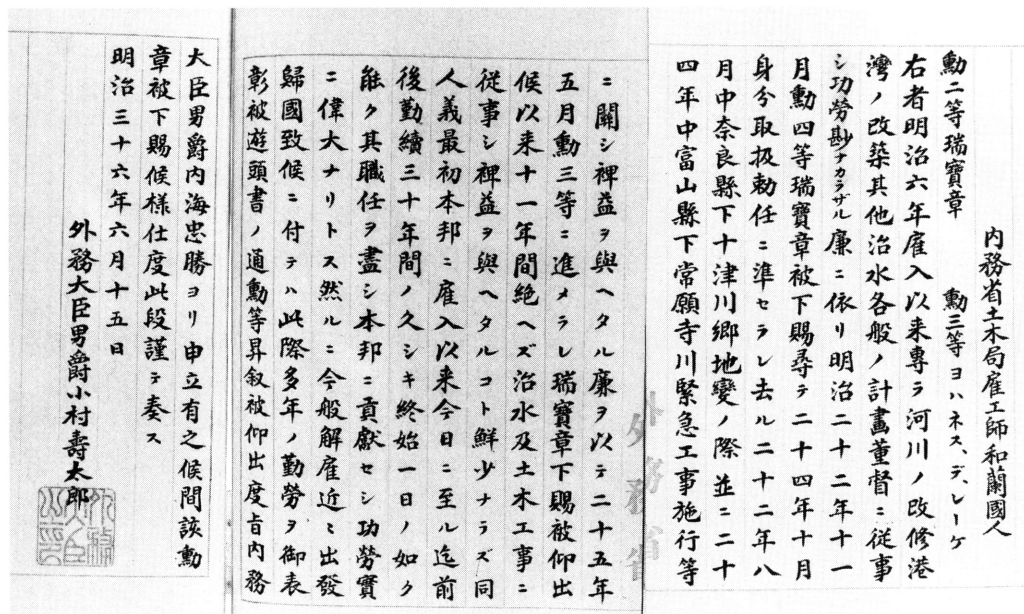
と記述し、勲二等瑞宝章を捧げた。数多くのお雇い外人のなかで勲二等の栄誉を受けたものは彼の外に一人しかいなかった。

日本を離れた後も中国上海港で黄浦江改修の技師長として大きな実績を挙げた。晩年68歳でオランダ女王から「オランダ国師子勲位における勲爵士」という貴族に列せられた。

1913年（大正2年）アムステルダムで70年の生涯を終わった。

明治期の「お雇い外人」は数千人に達したが、中でもオランダ人土木技師団は僅かに10名であったが、彼らが手がけた治山・治水と港湾の改修・建設は日本の災害を減少させ、交易の発展に大きな貢献をしたことを銘記しなければならない。

写真7. デ・レイケ帰国に際し勲二等を授けられる（国立公文書館文書）



1. デ・レイケとその業績 建設省中部地方建設局 1987年
2. デ・レイケ研究 第1～第11号 デ・レイケ研究会
3. 富山県諸河川の明治24年7月大災害に係るデ・レイケの調査報告（和訳版）  
上林好之，市川紀一1996年11，12月1997年1，2月
4. 川口居留地2 川口居留地研究会 1989年
5. 明治以降本邦土木と外人 土木学会 1942年
6. 内務省史 大露会 1980年
7. 淀川百年史 建設省 近畿地方建設局 1974年
8. 木曾三川治水百年のあゆみ 建設省 中部地方建設局 1995年
9. 富山県治水と蘭人技師デ・レイケ 前田英雄 越中史壇104号
10. デ・レイケ来日の旅と川口居留地 前田英雄 富山近代史研究第15号 1992年
11. 北陸政論（新聞）明治24年～26年の記事
12. 蘭人工師エッセル 日本回想録 福井県三国町 1990年